

編集を終えて

東京大学先端科学技術研究センター
20年史編集室代表・特任准教授

菅原 琢

かつて柳田博明第2代センター長がNHKの「日曜インタビュー」に出演した際、「海図なき航行」という言葉で研究者のあり方を表現した。この言葉通りに先端研は、東京大学の一部局でありながら、学内にも他の大学にも例のない全く新しい研究組織のあり方を模索し、そして現在も先の見えない航海を続けている。

筆者が1年前に先端研に赴任して最初の仕事は、とにかく先端研のことを知ることであった。そこで、先端研に関連する書籍を読み、全体像を掴むことから始めたものの、知れば知るほど像が結ばず、編集の方向性も方法も定まらなかった。先端研は、時期によって全く違った顔を見せているのである。さらには、先端研が公的に出している諸資料を収集しようとしても、何があるのか、それがどこにあるのかさえ判然としない状況であった。編集室開設当初、御厨貴広報委員長から20年史プロジェクトにキャッチコピーを付けるよう依頼されたが、先端研という組織を把握することができない筆者にはそれすらも困難な要求であった。

そのような中、鈴木、通傳両編集室員と訪ねたのが編集委員であり初期の先端研を知る堀浩一先生である。堀先生の話によって、先端研の変質の歴史を知り、先端研の背景にある問題が炙り出されることとなる。同じ日に、先端研図書室に資料調査に行き、当時非常勤で図書室のスタッフを勤めていた秋山紀さん（設立時の図書掛長）にお話を伺ったこともまた、先端研とは何かを知る上で貴重な機会となった。かつては先端研所属教員の研究報告書などが集まってきたが、現在はそういったシステムがなく、図書室にあるのは90年代までの古い資料ばかりとなっていた。

このおふたりのお話を通じて浮かび上がってきたのは、華々しく活躍する一方で、自らの存在理由を見失った先端研の姿である。

東大の実験場という渾名が表すように、先端研は他の組織に先んじて新しい制度、方法を導入する役割を負った組織である。当初は時代を切り拓くイメージで見られ成功した先端研であったが、しかしこれが成功すればするほど他所に真似されることとなる。このことは、フォロワーが多数出現し、オリジナルである先端研もろとも陳腐化するという運命を意味する。この運命に抗うため、先人たちは知恵を絞り、先端研の姿を次々と変化させていった。先端学際工学専攻のような関連組織の設置、知的財産権大部門の設置のような研究組織の改組、特任教員制度のような新しい制度の導入など、先端研の試みの多くは、時代を先取りし、それが良いか悪いかは別にして社会に受け入れられた。

だが、この変化、試みが意味を持つのは、旧態依然とした大学システムが一方に厳然とあり、これに対峙する先端研という構図があってこそである。現在、国立大学法人化と交付金の削減の中で、先端研の位置づけ、存在理由を規定した絶対的な存在としての大学システムも変容し始めている。国立大学、あるいは研究教育環境全体が、いわば「先端研的」状況となっているのである。このような中

では、先端研の新しい試みも「尖端」としては認識されず、数ある試行のひとつとして相対化される。略称を「先端研」とする研究組織はいまや全国にある。学際性を標榜する組織、産学連携を強調する組織は東大内にもある。先端研ははたして唯一無二の存在だと言えるだろうか。

また、先端研自身も、かつての尖がった存在ではなくなってきていると言われている。東大の部局で定年延長に唯一反対し話題となったものの、結局その後対案を出すこともなく、60歳以上の特任教員化で他部局に遅れをとったのはその一例であろう。ときどき聞かれる、先端研は普通の研究所になったという評価は、他の組織が先端研的になってきたと同時に、先端研が丸くなったことの表れでもあるのだろう。

これまで先端研は、常に変化し、新しい姿を見せ続けることで、価値を認められてきた。しかしそれが通用しなくなり、自らの存在理由を見失いつつある組織、それが現在の先端研である。

では、このような歴史観に立ったとき、20年史は、あるいは20年史を作るという作業はどのような意味を持つのか。先に述べた御厨委員長の依頼は、まさにこのことを問うたものであった。筆者はこれに対し、「先端研の自省録」という答えを用意した。

20年史を作り、これまでの歴史を振り返るということは、先端研とは何であるのか、自らの歴史から知るということである。次々と人が入れ替わり、過去が過去として蓄積されず、先例が先例として共有されずに、先端研は航海を続けてきた。20年史の作業は、これまで先端研が進んできたこの航路をあらためて海図に描く作業に他ならない。過去と対峙し、過去を捨ててきた先端研だが、自らが何であるのか知るために、これからの針路を決めるために、あるいは航海を止める決心をつけるために、これまでの航跡を省みる機会、それがこの20年史ではないだろうか。

編者として、この「二十年史」が先端研関係者のみなさまにお役に立てれば幸いである。

さて、先端研だけでなく20年史の編集作業もまた、「海図なき航行」そのものであった。以下、この場を借りて編集室の航跡も書き残しておく。

先端研20年史編集室は、2006年10月に筆者が赴任したときに開設される。当初の人員は、担当秘書の渡辺有里子、御厨ゼミ出身で文学部4年の鈴木健太郎、同じく御厨ゼミ出身で経済学部4年の通傳友浩の4名であった。11月には当時教養学部2年生であった川口航史、広瀬一朗の2名が加わり、2007年1月に同じく教養学部2年生の谷森太輔、5月には筆者のゼミから教養学部2年生の古橋直樹が編集室に加わった。

20年史編集室が最終的に成果として出すものは、本書『東京大学先端科学技術研究センター二十年史』のほかに、年末刊行予定の新書版『先端研物語』（仮称）がある。プロジェクト進行中はそれぞれ、記録篇、物語篇という名前で呼ばれており、前者は簡単な解説と資料からなるもの、後者は元教員等のインタビューをもとに構成された読み物という性格付けがなされた。しかし先端研の複雑怪奇な歴史のもとでは、資料に付す解説が簡単なもので済むわけではなく、読み物も背景説明がなければ筋の追えないものとなることは明らかであった。したがって、実際のプロジェクト進行も両者の区別を意識せずに手を付けられるところから片付けていくというスタイルで進めた。

プロジェクトでまず取り掛かったのは、有益な資料の把握と収集である。これらの資料をもとに、インタビューのための資料を作り、記録篇のためのデータ入力を行うという算段であったが、この作業は最初から困難を極めた。先端研というところは、公開性というモットーとは裏腹に、自らの事跡を整理し世に報告するという体系的な作業を、これまでほとんど行っていないのである。先端研にとって公開性とは、散発的に行っているシンポジウムやキャンパス公開のことであって、記録の蓄

積ではないということである。

数少ない体系的な資料としては『先端研紀要』があるが、発行は2000年を前に行われておらず記録の間違いも非常に多い。『先端研ニュース』は、他の媒体と同じく年代によって取り上げる事項も変わり、人事異動をはじめとする基本情報すら載ったり載らなかったりという状況である。

結局、本書に収められたデータは、あらゆる媒体から情報を集める作業を通して出来上がったものである。ただし、先端研が公的に出している情報であっても、かなりの割合で間違いがあり、資料間で齟齬があるということもしばしばであった。その際、先端研が公的に出しているあらゆる情報は全て嘘であるという仮定のもと、なるべく複数の資料によって確認を行っている。資料間で記録に齟齬があった場合には、確実な資料がない以上、論理的に考えて最も正しいと考えられるものを採用している。データ入力にかかった時間の多くは、コンピュータへの打ち込みではなく、このような資料に起因する問題を解決するために、複数の資料で確認し、ときには議論し、あるいは問い合わせたりすることに費やされたものである。

編集室としては、限られた時間と人員の中で最大限のことを行っており、他の先端研名義の諸媒体に比較して正確な情報を掲載しているという自信はある。実際、この作業を通して先端学際工学専攻の博士号取得者数は事務方の資料に記入されていた人数から10%以上増え、入学者数もより正確な数となった。しかし、それでも結果的に正しくない情報が掲載されている可能性は否定することができない。結局、この資料収集とデータ作成、修正の作業は、2007年8月末まで続くこととなった。

この資料収集、データ整備と平行し、元センター長を中心とする関係者のインタビューも行った。2006年11月から開始し、2007年3月までで総勢20人にインタビューを行った。さらに多くの方々にインタビューを行いたかったが、時間の関係上ここまでで限界であった。9月に体調を崩し、11月に亡くなられた元センター長の柳田博明先生にお会いできなかったのが残念でならなかった。このインタビューの多くは、今後出版される『物語』の基礎となっている。

本書の執筆に入ったのは、2007年2月ごろからである。3月までに序章、第1章、第3章の多くの部分は書き上げたが、書きながらデータの間違いに気づくこともしばしばで、結局最後までデータの作成・修正作業が編集作業進捗のボトルネックとなった。本編最後の原稿である第2章を提出したのは8月の末に入ってからである。

着任前の話では週1日か2日活動すればよいとの話であったが、すぐに週3日、4日となり、2007年度に入ってからには週5日、6日の体制で運営し、7月から9月にかけては別の仕事の関係もあって土日含め毎日研究室に籠もることとなった。このような巨大な作業を終えることができたのは、一にも二にも、優秀でいて楽しむことを忘れない編集室員のみなさんのおかげである。心から感謝申し上げたい。また、御厨教授をはじめ、研究室のみなさまには物心両面でサポートをいただいた。そのほか、橋本和仁前所長、宮野健次郎所長、広報担当の神野智世子氏、編集委員の諸先生方をはじめとして、先端研の教職員のみなさまにも大変お世話になった。そして中央公論事業出版の平林敏男社長、堀川博取締役、編集を担当された増田岳史氏には、度重なる原稿の遅れをお詫び申し上げるとともに、立派な本に仕上げただけに、御礼申し上げたい。

2007年10月

二十年史編集関係者一覧

【先端研二十年史編集委員会】

御厨 貴（委員長）、荒川泰彦、児玉龍彦、南谷 崇、馬場靖憲、堀 浩一、宮山 勝、橋本毅彦（オブザーバー）、神野智世子（オブザーバー）

【先端研20年史編集室員・分担一覧】

菅原 琢（特任准教授）

統括、年史企画・原案、執筆（第1章第2節・第5節、第2章第1節・第5節、第4章第3節）、加筆修正（全原稿）、校正、インタビューア、データ作成・整理（全データ）、作図・作表、写真整理・加工、連絡業務、その他

川口航史（現在：法学部3年）

執筆（第2章第2節・第3節・第4節、第4章第1節・第2節）、データ作成（担務表、交付金教員、客員教員、寄付研究部門関連、スーパーCOE関連、受賞・表彰、先端学際工学専攻関連データ、セミナー・シンポジウム）、作図・作表

鈴木健太郎（文学部4年、現在：防衛省職員）

執筆（序章第3節、第1章第3節・第4節、第3章）、加筆修正（序章第1節・第2節）、インタビューア、インタビュー資料作成、資料発掘・収集・整理

谷森太輔（現在：文学部3年）

データ作成（セミナー、シンポジウム）

通傳友浩（経済学部4年、現在：日本銀行職員）

執筆（序章第1節・第2節、第1章第1節、第2章第6節）、データ作成（組織変遷、財務状況、図書室、博士号、報道、年表）、作図・作表、資料収集、写真撮影、作業用ネットワーク構築・メンテナンス

広瀬一朗（現在：法学部3年）

執筆（年表）、校正、データ作成（協議会、参加会、年表）、写真整理

古橋直樹（教養学部2年）

執筆（第5章）、データ作成（博士号）、写真整理・加工

渡辺有里子（20年史編集室担当秘書）

財務・労務管理、写真整理、連絡業務、その他

【協力者一覧】

青木 保（元教授）、青島裕子（テープ起こし、速記録作成）、秋山 紀（元図書掛長）、今井 雅（駒場オープンラボラトリー特任准教授）、伊藤 滋（元教授）、伊藤良一（元教授）、鶴塚万理（経営戦略企画室秘書）、大須賀節雄（元センター長）、岡部洋一（元センター長）、置塩 文（テープ起こし、速記録作成）、加藤 博（技術専門職員）、軽部征夫（元教授）、菊池信治（企画調整担当係長）、岸 輝雄（元センター長）、木原諄二（元教授）、熊崎丈晴（教育研究支援担当主任）、胡内奈都子（図書係員）、澤 昭裕（経営戦略担

当教授、副所長)、鈴木亮太(教養学部1年)、相馬宣和(前経営戦略担当准教授)、染谷雅子(御厨貴研究室秘書)、竹内 啓(元教授)、竹内千尋(御厨貴研究室秘書)、玉井克哉(教授)、手塚洋輔(御厨貴研究室特任助教)、中野義昭(教授)、二木鋭雄(元センター長)、丹羽清隆(テープ起こし、速記録作成)、野口悠紀雄(元教授)、橋本和仁(前所長)、平野裕士(人事給与担当係長)、廣松 毅(元先端研教授、現教養学部教授)、松井潤一(前総務係長、現東京大学本部研究推進グループ長)、三神 緑(所長室秘書)、宮野健次郎(所長)、村上陽一郎(元センター長)、安田佑子(御厨貴研究室秘書)

東京大学先端科学技術研究センター二十年史 ある一部局の自省録

2007年10月18日発行

編集・発行



東京大学先端科学技術研究センター
Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo

〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1
電話 03-5452-5111
<http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/>

製作

中央公論事業出版

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7
電話 03-3535-1321 Fax 03-3535-1325
<http://www.chukoji.co.jp/>

印刷／藤原印刷 製本／青木製本所